

慶長五年十二月二十日和漢聯句訳注(下)

大山和哉  
川崎美穂  
河村瑛子  
中村健史  
野澤真樹

4 注釈(承前)

(二折ウ)

(さそはれたつも鳴むら鴉)

41 あらましき風より雲のたゞよひて

新宰相

【式目】雑

【注釈】「雲↓たつ」(連珠合璧集)。前句、連れだつて飛び立とうとする「むら鳥」が鳴き声をあげるのは、風が激しいからだ、と付けた。「あらましき」は、『言塵集』巻二に「あらましきは あらあらしき也。風の音のあらましきなど有」と見え、荒々しいさま。強風を「あらまし」と詠む和歌に、「あらましき風こそ憂けれ咲く花に交へても見む松の緑を」(後水尾院御集・一三四八)などがある。「風より」は、「風が吹く後には」の意で、『菟玖波集』の「松ばかりには冬がれもなし／木葉ふ

く風より月はあらはれて」(冬・九六五・藤原道直)とある例に近い。

【訳】荒々しい風が吹く後には、雲が漂つて(仲間に誘われて飛び立った鳥同士が鳴き交わしている)。

42 照斜<sup>○</sup>惜景<sup>●</sup>移<sup>●</sup>

照斜景<sup>かけ</sup>の移<sup>カ</sup>るふことを惜しむ

【式目】雑

【押韻】移(和訓押韻) 移<sup>ウツル</sup> (漢和三五韻)

【注釈】狩野本は当該句を欠く。「入日↓雲間」「雲↓夕ゐる」(連珠合璧集)、「日↓雲」(俳諧類船集)。前句の「雲」が「風」で吹き流されることで、「照斜」が差し込むと付けた。また、前句の「たゞよひて」という言葉から、切れ切れに漂う雲の間から「照斜」が差し込んだことが連想される。「照斜」は夕日、残照の意である「斜照」に同じ。二四不同を避けるため語順を

入れ替えた。英甫永雄「赴耶溪道中作（耶溪に赴く道中の作）」に「凍雨霏霏夕照斜、朔風吹面手難遮（凍雨霏々として夕照斜めなり、朔風面に吹きて手遮り難し）」（翰林五鳳集所収）。「景」は『説文解字』に「日光也（日光なり）」とあるように、ここでは日光の意。「景移」は、杜甫「紫宸殿退朝口號」に「香飄合殿春風轉、花覆千官淑景移（香は合殿に飄りて春風転じ、花は千官を覆ひて淑景移る）」（詩人玉屑・卷四所収）と見られるほか、『錦繡段』の寇平仲「春日作」に「風簾不動黃鸝語、坐見庭華日影移（風簾動かず黃鸝語る、坐に見る庭華日影の移ろふを）」と見え、日が傾くこと。

【訳】（風で流される切れ切れの雲間から）夕日が差して、日の入り方になるのを名残惜しく思う。

### 43 楓時林自翫

楓時林自翫あひ

集雲

【式目】 秋1（楓） 林（二句物①）

【注釈】 狩野本は四字目「自」を「目」につくるが、句意から考えて底本にしたがう。「紅葉↓てる」（連珠合璧集、俳諧類船集）、「紅葉↓峰の夕日」（拾花集、竹馬集、俳諧類船集）。前句の「照斜」によって照らされる紅葉を林中に愛でると付けた。

当該句は、紅葉が夕日によってより赤くなることと詠む和歌、「小倉山西こそ秋と訪ぬれば夕日にまがふ峰のみみち葉」（壬二集・五五四）と、夕暮れに紅葉を見ることを詠む詩、杜牧「山行」の「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花（車を停めて坐に愛す楓林の晩、霜葉は二月の花よりも紅なり）」（三体詩所収）の二つによって発想された句であろう。「楓時」は楓が紅葉する時期のこと。和漢聯句に、「はし居の袖にふくる夜の秋／楓時山

著色（楓時山色を著く）」（大永五年十二月九日和漢聯句・六九・高倉範久）という例が見える。

【訳】（日の入り方を名残り惜しく思いながら、夕日に照らされた）楓が紅葉する頃、林で自然と賞翫される。

### 44 霧よりうへにのぼる高樓

尹

【式目】 秋2（霧） 樓（二句物①）

【注釈】 底本は「高路を」とするが、意味が通らない。狩野本の本文「高樓」、及び天理本の「高路たかみち」という傍記にしたがつて、本文を「高樓」に整定した。「霧↓紅葉」（連珠合璧集、俳諧類船集）、「樓↓山く／＼の紅葉」（拾花集）、「殿↓紅葉」（拾花集、竹馬集）。紅葉を見るために樓に登る、と付けた。「霧よりうへに」は、霧がかかっているそれよりも上方の意で、樓の高さを強調する表現。樓でこそないが、峰について同様の詠み方をした連歌の例に「はつ秋なれや半天の雲／富士はその霧より上に見えかくれ」（文明十四年万句・第六千句・第一・賦山何連歌・六三・可卜）がある。「たかどの」は、『語抄』娘捨に「上へ高き家ヲ樓ト云」とあるように、高く聳え立つ建物。「高殿」と表記するのが常套で、「高樓」に「タカドノ」の訓を付すことは珍しいが、「樓」を「タカドノ」と読ませるのは一般的である（類聚名義抄）。また『新撰菟玖波集』では「月の名のか殿はるゝ南かな」（発句下・三七五八・後花園院）と詠まれるが、いずれにしても当該句と一致する表記は見出し難い。

【訳】（紅葉を賞翫するため）霧より上方に聳える楼閣に登る。

45 月深けて秋涼到

圃

【式目】 秋3 (月・秋涼)

【注釈】「霧↓月ほのか」「楼↓涼しき月」(拾花集、竹馬集)、「霧↓深」(俳諧類船集)。前句の「高楼」に登ると、霧に遮られることなく月が見え、秋の大きをより一層冷たく感じられると付けた。「秋にそゑつるかへるさと人／登楼風愈冷(楼に登りて風愈よ冷し)」(天文二十四年三月二十五日和漢千句・第七・後奈良院)。「楼」から「月」への展開は「晋庾亮ト云者、秋ノ夜、月ノ面白サニ興ニ乗ジテ南楼ニ登リテ月ヲ愛セシ」(謡抄・三井寺)という故事に拠るもの。『和漢朗詠集』に取られた白居易の詩(雪・三七四)で有名な逸話である。また、「霧」よりも上に「月」が見えると詠む歌に、「明石潟島隠れつつ行く舟の霧より上に月ぞ残れる」(壬二集・二九八)。「秋涼」は秋の冷氣。和漢聯句に「月にちぎれる夜半ぞみじかき／下榻些涼到(榻を下せば些涼到る)」(文明年間六月十九日和漢聯句・二九・周基)という例がある。「月深」、すなわち月が更ける、夜が深まったからこそ「秋涼」が訪れるのである。

【訳】(霧より上に聳える楼では) 月が更けて、秋の冷氣がやってくる。

#### 46 海遥朝日遅 海遥かにして朝日遅し

【式目】 雑 海 (二句物①) 朝 (二句物②)

【押韻】 遅 (和訓押韻) 遅ヒヤシ ウラ、カ (漢和三五韻)

【注釈】 対句で展開した。前句の夜の景に対して朝の景を付ける。また、前句で秋が深まったから日の昇りが遅いと付けたか。「深↓海」「朝↓月薄き」(俳諧類船集)、「海↓月」(竹馬集)。「海遥」とは、海から遠く離れた場所。「遥」は「いづくより

たつともわかず霧ふかみ／村遥桑柘煙(村遥かにして桑柘煙る)」(天文十九年十月二十二日和漢聯句・六・三条公頼)のほか「郷遥」、「野遥」など間々見られるが、「海遥」の用例は和漢聯句では稀有。「朝日遅」は朝日が昇るのが遅いの意。和漢聯句に、「山ふかく花にといそぐ袖みえて／林隙日昇遅(林隙日昇ること遅し)」(天正十九年四月和漢千句・第五・五〇・後陽成院)という例が見えた。

【訳】(月が更けて、冷やかな秋がやって来る。) 海から遠く離れた場所では、朝日はゆっくり昇る。

#### 47 から崎や汀の水とけやらで

【式目】 春1 (氷とけ) 汀 (二句物②) 氷 (四句物①)

【注釈】 狩野本は「から崎や」を「唐崎の」につくるが底本にしたがった。「氷とくるには↓朝日さす」(拾花集)、「凍解るには↓朝日さす池辺」(竹馬集)。「朝日」がなかなか昇ってこないと詠んだ前句を受けて、それゆえ「汀の水」が解けきらないと付けた。「朝日さす峰の雪消や山川の水の上の水の白波」(草根集・二〇四)。また前句の「海」を当該句では琵琶湖と解して付ける。「から崎(辛崎、唐崎)」は、近江国の歌枕。『随葉集』の「からさき↓氷のとくる」という寄合、その典拠となる『詞花集』の「氷りゐし志賀の唐崎うちとけてさざ波寄する春風ぞ吹く」(春・一・大江匡房)より、唐崎に張る氷のことを詠むのが常套だが、当該句ではあえて「とけやらで」と否定した点が作者の工夫か。一句で解した時は、氷が解けないのはまだ春が浅いためである。連歌の類例に、「まだ下もえは草ぞわかれぬ／春あさき汀の水むすばれ」(葉守千句・第九・二九

・泰誼) など。

【訳】(朝日がゆっくり昇るので) 唐崎では波打ち際の氷が解けないで。

48 たえぐにしもかすむ大岳おほだけ

【式目】春2(かすむ)

護

【注釈】「比叡↓辛崎」(俳諧類船集、「氷とくる↓けむる朝霞」(拾花集)。「氷」も十分には解けていないと詠む前句を受けて、霞も一面には立ちこめず「たえぐ」にたなびく早春の景で付けた。「唐崎や春のさざ波うちとけて霞をうつす志賀の山陰」(拾玉集・一七一〇)。また、前句の水辺の歌枕「から崎」に、同じ近江国にある山類の歌枕「大岳」を付け、解けない氷とたえぐの霞を対比させている。和句による対句的な構成である。「たえぐ」は『日葡辞書』に「Taydaye:タエダエ(絶え絶え) 例、Taydayeni nanu (絶え絶えになる) 次第に衰え弱って行くとか、少なくなっていくとかする、など」。途絶えそうになりながらも、かろうじて山を霞ませているさまである。大岳は比叡山のこと。「比叡の山その大岳は隠れねどなほ水のみは流れてぞふる」(永久百首・二六六・源俊賴)。また、桂宮本『春夢草』には「比叡の山にて」の詞書を持つ発句「大だけや月にすゝ吹あらし哉」について「大嶽はひえの山の高き心也。景気までなり」という注が見え、「大岳」とは比叡山の雄大さを表現するのだ、と説明している。

【訳】(唐崎では氷も解け切らない早春なので) 今にも途切れそうに霞む雄大な比叡の山。

49 松風花欲落 松風 花落ちんと欲す 節

【式目】春3(花) 松風(二句物①)

【注釈】狩野本は一字目を「杉」につくるが、今にわかにはその良否を定めがたい。ひとまず底本の「松」という本文にしたがつて注釈する。「大比叡近江↓花」(俳諧類船集、「花↓霞」(拾花集)。前句「大岳」を「たえぐ」に霞ませているのは「松風」によつて散つた花なのだ、と付けた。「霞みつつ花散る峰の朝ぼらけ後にや風の憂さも知られむ」(続古今集・春下・一四九・宜秋門院丹後)に近い発想で、前句を霞のように舞い散る桜を描いたものと読みなし、その花びらが今にも枝を離れようとする瞬間を描いた句である。松風が花を散らせると詠む例に、「このころや雪を雲井にかへすらん花の麓に騒ぐ松風」(雪玉集・一〇六)。この場合、「松風」は早春の山を象徴するものとして描かれているのだろう。なお、前句の「かすむ」を実際の霞と解釈することもできようが、その場合、早春の前句に晩春の景を付けたことになり、不自然さをまぬがれない。

【訳】松風が吹いて、今にも花が散ろうとしている(その花が途切れ途切れに比叡の嶺を霞ませてゆく)。

50 柳巷杏堪披 柳巷 杏披くに堪へたり 心

【式目】春4(柳・杏) 柳(三句物①)

【押韻】披(和訓押韻) 披ヒツツ(漢和三五韻)

【注釈】対句によつて展開した。「風↓みだるゝ柳」(俳諧類船集)、「花↓柳」(拾花集、竹馬集)。前句の「花」は桜の白色をイメージさせるものとして詠まれたが、当該句では赤色の「杏」を付けて対句とした。なお和漢聯句における「花」と「杏」の

対比効果については、楊昆鵬「和漢聯句における漢的素材

——「杏」と「からもも」——」（連歌俳諧研究）一一三、二〇〇七年九月）に詳しい。「巷」は『説文解字』に「里中道（里中の道）、清原宣賢『毛詩抄』巻四に「巷は入えの様な道ぞ

本の大道ではない」とあるように、大通りから離れ、入りくんだ村落の道をいう。そこに柳が生えているのが「柳巷」である。

陶淵明「歸園田居」五首其一に「狗吠深巷中（狗は吠ゆ深巷の中）」（古文真宝・前集所収）とうたわれるように、隠者にふさわしい、ひなびた場所であるが、それでも杏の花はひらく、というのが一句の大意。「柳巷」に咲く花を詠む詩に、李商隱「戲題友人壁（戯れに友人の壁に題す）」の「花徑逶迤柳巷深、小闌亭午轉春禽（花徑逶迤として柳巷深く、小闌亭午春禽轉る）」がある。

【訳】（松風に花が散ろうとするころには）柳が植わっている路地であっても、杏が花開くに十分だ。

51 樵指酒村咲  
【式目】 雑

樵は酒村を指して咲ふ

甫

【注釈】 狩野本は以下、挙句までを欠く。杏の咲く「柳巷」を詠んだ前句に対して、遠くから「あのあたりが酒村だ」と指さして笑う樵を描いた。付合の典拠は『聯珠詩格』などに収められた杜牧「清明」詩、「清明時節雨紛紛、路上行人欲斷魂。借問酒家何處有、牧童遙指杏花村（清明の時節雨紛々、路上の行人魂を断たんと欲す。借問す酒家何処にか有ると、牧童遙かに指す杏花の村）」。「咲」は『集韻』に「笑、古作咲（笑、古へ

は咲に作る）」と見え、わらうの意。ここでは前句「杏堪披」を受けて、「杏の花が咲くように、樵も顔をほころばせたと」いうのである。なお、和漢聯句では「紅意尋花履（紅意花を尋める履）／黄封沽杏帘（黄封杏を沽る帘）」（慶長四年九月十一日和漢聯句・五〇・英甫永雄）のように、「杏」が「酒」の暗喩として使われる例も少なくなく、両者は縁語関係にあるといつてよいだろう。

【訳】 樵夫は酒屋のある村を指さして笑う（そこには柳があり、杏が花開いている）。

52 いそぐ行衛のちかき朝市

然

【式目】 雑

【注釈】 「酒↓市のかりや」（拾花集）、「市↓酌酒」（拾花集、竹馬集）といった寄合書の記述からも明らかのように、「市」は酒を飲ませる場所でもある。「風寒み旅なる人の道ぶりに飲み捨てて行く市の味酒」（草根集・九八八〇）。そこで、樵も、樵にたずねた人も、ともどもに「朝市」へと急ぐ、と展開した。「柴おふ馬の急ぎ行送／いまだ日は出やらぬ間の朝市に」（天正十四年十二月七日漢和聯句・二九・細川幽齋）の例が示すとおり、樵は柴を売るために市へ行く。わざわざ「ちかき朝市」に「いそぐ」のは、利を求めるがゆえであろう。「鼓声報市来（鼓声市の来るを報ず）／利奔何踏実（利に奔りて何ぞ実を踏まん）」（慶長十八年九月二十三日和漢聯句・九三・有節瑞保）。一方酒客は、かしこに旗亭ありと聞いては、ひとときもがまんがならず、道がせかれる。両者、事情は異なるが、「ちかき朝市」に急がねばならぬ理由があるのである。

【訳】(酒屋のある村を指さして笑った樵も、教えてもらった人も) 急いで行った先は、近くの朝市。

53 程く〜にこゆべき年の春待て

高

【式目】冬1(春待て)

【注釈】「年の暮↓いそがはしきゆき」(随葉集)、「としのくれ↓往来を急道」(拾花集、竹馬集)。前句「ちかき朝市」に「いそぐ」理由を、年越しをひかえたあわただしさゆえだと見定めて付けた句。同様の発想に「袖はへて年の境に立つ市の行きかひ急ぐ道ぞにぎはふ」(黄葉集・一〇二三・市歳暮)がある。「程く〜」は、それぞれの身のほどに応じての意。『日葡辞書』に「Fodofodoni xiatate. (程々に随つて) すなわち、buzami xiatate. (分際に随つて) 能力に従つて」という説明が見える。人それぞれに春を迎えるさまを詠むことは、当時一つの定型であったらしく、この句に似た例として「暮にしころの年のいとなみ／ことぶきもそのほどく〜にしたがひて」(飯盛千句・第五・六一・為清)、「恵みあれば上中下のほどほどに我が身の春を宿に迎へて」(後十輪院集・三四五・毎家有春)などが挙げられる。

【訳】(近くの朝市に急ぐのは) それぞれの身のほどに応じて、年を越そうと春を待って(いるからだ)。

54 わかつ位はしなぐ〜にこそ

【式目】雑

【注釈】身のほどに応じて年越しをするという前句に対して、さまざまな「位」(官位)があるからこそ、そうした「程く〜」

が生まれてくるのだ、と付けた。また、叙位は正月の五日または六日に行われるため、「春待ちて」と呼応する(ただし一句では無季)。「しなぐ」は「Xinajina. シナジナ(品々) 多くの、あるいは、様々の種類や型」(日葡辞書)があること。「暁珂押紫宸(暁珂紫宸を押す)しなぐ」につかふるみちをあふげなを」(天文十六年十一月八日和漢聯句・一一・雅業王)のような例から考えれば、一句は「人々は数多くの「位」に分かれている」というだけでなく、「それぞれに役割を果たしつつ、朝廷に仕えている」の意を含むか。なお、北村季吟『増山井』に「諸臣の年労を奏し、位を次第に叙す」とあることから、「しなぐ」を「それぞれの功勞にしたがって」とも解せようが、類例が和歌、連歌に見られないため、こゝではひとまず先の解釈に拠る。

【訳】(それぞれの身のほどに応じて、年を越そうと春を待つのは) 位がさまざまに分かれている(からだ)。

55 あらそふもけふの馬場の右左

日野

【式目】夏1(馬場の右左)

【注釈】前句「位」から詞の縁で「あらそふ」を連想した。陰暦五月五日、六日、騎射を競った引折(日折)の行事を詠んだ句。前句「位」を競技結果の意に取りなして付けた。引折については、一条兼良『歌林良材集』巻下・二十五に「凡左右近の騎射は、五月三日は左近真手結、四日は右近のあらてつがひ、又五日は左近の真手結、六日は右近の真手つがひ也」と見える(『謡抄』右近もこれを引いて注する)。文中「荒手結」は予行演習、「真手結」は本番の騎射をいい、五日は左近衛府

の舍人、六日は右近衛府の舍人がつとめた。当時すでに衰退していたらしいが、連歌には「車の右に乗りし帰るさ／人を見る馬場のひをり時過ぎて」(竹林抄・雑上・一〇八七・宗砌)、「あすはいかなる道か分まし／あらせへる馬場のまへのみぎひたり」(神宮皇学館文庫蔵千句連歌・第七・八一・紹巴)などの例があり、『拾花集』夏にも「ひおりの日 右近左近の馬場にての祭の日の事也」と記される。なお結句「右左」は右近の馬場と左近の馬場の意。日折の騎射がそれぞれの馬場で行われたことは、次句の注釈に引く業平歌から分かる。

【訳】人々が争うのは今日のこの日の右近、左近の馬場(引折の結果は、勝ち負けさまざま)。

## 56 道もさりあへずたてる小車

【式目】 雑

【注釈】 底本は「さかあす<sup>ま</sup>」につくるが、句意から考えて天理本の本文「さりあへず」を採る。引折の騎射を見ようと集まった物見車が、避けきれないほど道に立ちならんでいるさまを詠んだ句。以下に示す『古今集』恋一の贈答歌により、「馬場の右左」(引折)と「小車」が寄合となる。「車↓ひほりの日」(連珠合璧集)、「ひをりの日↓立る小車」(拾花集、竹馬集)。

右近の馬場の引折の日、向かひに立てたりける車の  
下簾より女の顔のほのかに見えければ、詠んでつか

はしける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ

暮らさむ

返し

よみ人知らず

知る知らぬ何かあやなく分きて言はむ思ひのみこそしるべ  
なりけれ

(古今集・恋一・四七六／四七七)

右近の馬場の騎射を見物に来た女に業平が恋をしかけたというこの話は、『伊勢物語』九十九段のほか、『竹馬集』にも引かれるなど、連歌の世界ではよく知られていたらしい。「道もさりあへず」は『古今集』春下「あづさゆみ春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける」(一一五・紀貫之)以来の定型表現。道にものが充満するさまをいう。「小車」は『日葡辞書』に「Yogunna・ラグルマ(小車) 詩歌語・車」と見え、単に車(牛車)の意。

【訳】(技量を争う今日この日、右近、左近の馬場の騎射を見物しようとして)道に避けきれないほど車がとまっている。

## 57 野●花●除●露●摘● 野花露を除ひて摘む

【式目】 秋1(野花・露)

圃

【注釈】 前句「小車」を野遊びのそれと取りなした。人々は秋の野に集まり、花に宿る露をはらい落としながら折っている。

「除」は『類聚名義抄』『色葉字類抄』などに「ハラフ」の訓が見えた。「秋の野の露に置かるる女郎花払ふ人なみ濡れつつやふる」(後撰集・秋中・二七五・よみ人知らず)のような和語表現に学んだものであろう。露は花を折る人の袖を濡らす。

「いくたびか袖濡らしけん萩が花折らば落ちぬべき露と見ながら」(衆妙集・三四二)。だからこそこの句は「除露摘」と詠むのだが、和歌、連歌では普通「たとえ袖が濡れても、美しい花を手折ろう」とうたうことが多い。

【詠】(道に避けきれないほど車がとまっているのは) 露を払って野に咲く花を摘む(ためである)。

58 秋<sup>○</sup>菊<sup>●</sup>歴<sup>●</sup>霜<sup>○</sup>衰<sup>◎</sup> 秋菊霜を歴て衰ふ

心

【式目】秋<sup>2</sup>(秋菊)

【押韻】衰(和訓押韻) 衰<sup>マドロフ</sup>(漢和三五韻)

【注釈】天理本は「菊」を「菊<sup>1</sup>」につくるが、底本にしたがう。

対句によって展開した。また「菊<sup>1</sup>摘」(連珠合璧集)という寄合が踏まえられている。菊が霜によってすがれてゆくさまは、晩秋の象徴。時節のうつろいをあらわす。古くは『文選』巻二十六に収める謝朓「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚(暫く下都に使ひし夜新林を發して京邑に至らんとし西府の同僚に贈る)」詩に「時菊委嚴霜(時菊嚴霜に委む)」とうたわれ、李周翰の注に「委謂零落也(委は零落を謂へるなり)」という。和漢聯句では「蝶恨逢梅慰(蝶恨梅に逢ひて慰む) / しもにかれにし菌の白菊」(天文十一年十二月九日和漢聯句・五八・宗牧)のような例があった。なお『中華若木詩抄』には、「菊ハ落チ又花ト見エタル也」、菊は花びらを散らせることなく、枝に残ったまま萎れてゆくという考証が見えた(了彦登「淵明采菊」詩の抄文)。

【詠】(野の花は露を払って摘む) 秋の菊は(くりかえし) 霜を帯びて衰える。

59 寂<sup>○</sup>籟<sup>●</sup>扣<sup>●</sup>蛩<sup>○</sup>戸<sup>●</sup> 寂籟蛩戸を扣く

化

【式目】秋<sup>3</sup>(蛩)

【注釈】「蛩」はきりぎりすの意。「きりぎりす↓霜夜」(隨葉

集、竹馬集)。蘇軾「和子由記園中草木(子由に和して園中の草木を記す)」十一首其十に「菊衰蛩亦蛩(菊衰へて蛩も亦た蛩す)」とうたうように、菊が衰えるころには虫もまたその住处を変える。『毛詩』幽風「七月」には「七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入我牀下(七月野に在り、八月宇に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀我が牀下に入る)」と見え、「蛩戸」はこれを踏まえた表現。九月になるときりぎりすは「戸」で鳴き、そこにさびしげな風が訪れる、というのが一句の意である。

「籟」は「まもりすつる閑屋も古りぬすゞか山/花後籟何歎(花後籟何ぞ嘆かん)」(慶長十五年十月某日和漢聯句・九八・土御門泰重)の例が示すように、風を指す。秋風であるので「寂籟」とした。風が戸を「扣」くと詠むこと、たとえば和漢聯句では「楊清竹作隣(楊は清うして竹隣を作す) / 誰歎風扣戸(誰ならんか風戸を扣く)」(慶長九年九月和漢千句・第六・八五・以心崇伝)とうたわれる。

【詠】(秋の菊が霜を帯びて衰えるころ) さびしげな風は、きりぎりすの鳴く戸を叩く。

60 夢より後も長夜の床

尹

【式目】秋<sup>4</sup>(長夜)

【注釈】天理本は「夢」を「みた」につくるが、内容から考えて底本にしたがう。「きりぎりす↓ゆかのあたり」(連珠合璧集)、「きりぎりす↓床の下」(隨葉集、竹馬集)、「戸↓人まつ」(拾花集、竹馬集)。「風が戸をたたく」さまを描いた前句から、それを人の訪れと聞きなすような「夜の床」の情景へと展開した。「夢より後も」は、夢から覚めた後の意。「いかに寝て見えし



なるらむうたたねの夢より後はものをこそ思へ」（新古今集・恋五・一三八〇・赤染衛門）、「あはれなを妻こふ鹿に音をそへて／夢よりのちもかたしきの山」（大原野千句・第十・二〇・宗仍）などの例がある。目覚めてみると、期待した人の訪れはなく、ただ風の音が「長夜の床」に響く。一句のしみじみとした情趣は、恋呼びとして次句にはたらきかける。

【訳】（さびしげな風が、きりぎりすの鳴く戸を叩く音で）夢から覚めた後も夜は長くつづく闇の床。

### 61 別ての形見とむかふ空の月

【式目】秋5（月） 恋1（別て・形見） 空（四句物②）

【注釈】「夜↓月」（拾花集、竹馬集）。恋人のことを思うよすがとして月を眺める女の様子を付ける。前句と付いた場合には夢の中での逢瀬が果てた後の女の様子となる。「思ひきや夢をこの世の契りにて覚むる別れを嘆くべしとは」（千載集・恋二・七五六・俊恵）。月が恋人の「形見」となる例には「つれなしと言ひても今は有明の月こそ人の形見なりけれ」（続後撰集・恋五・九七二・二条道良）、「いつかへりこむふるさとの秋／わすれじの月のみ人のかたみにて」（新撰菟玖波集・恋下・二〇〇四・冷泉為広）などがある。また、月をつくづくと眺める様を「月にむかふ」とする和歌の例には、「冴えわたる月にむかひて打つ衣幾年秋の声を告ぐらん」（拾遺愚草・二二二五）などがあるもののその数は少なく、「見し夢のかへる空こそ静かなれ／月にむかへば又秋のかげ」（葉守千句・第三・二八・玄清）などをはじめ、連歌において好まれた。

【訳】（夢が覚め、恋人と）別れた後の形見として見る空の月。

### 護

### 62 独臥涙淋瀝

【式目】恋2（独臥） 独（三句物①）

【押韻】瀝（和訓押韻） 瀝レツ（漢和三五韻）

【注釈】「後朝↓床に涙のあまる」（随葉集）、「別↓涙」（拾花集、竹馬集）、「月↓独ね」（拾花集、竹馬集）。別離の後に月を眺めるという前句に、一人床に臥しながら涙する様を付けた。「独臥」は一人で寝ること。白居易「秋夕」詩に「夜深方獨臥、誰爲拂塵床（夜深くして方に独臥し、誰が為に塵床を払はん）」の例がある。ただし、当該句でいう「独臥」は恋人の来訪がないまま寂しく寝ること、すなわち和語に言う「独り寝」の意で用いられている。なお、打越の句に「長夜の床」とあるため、当該句で「独臥」とするのは本来不適である。「淋漓」は液体の滴る様で、『韻府群玉』に「淋漓（赤龍拔鬚血―、韓。又酒―、墨―）」（上平声四支韻）とある。当該句では「涙」の滴り落ちる様を「淋漓」とする。

### 63 写紙情猶薄

【式目】恋3（情）

紙に写せば情猶ほ薄し

心

【注釈】『連珠合璧集』の「恋の心」の中に「なさけ」とあることから、恋の句ととる。一人床に臥して涙する女に対し、その涙の理由を薄情な男からの手紙として付けた。また、前句の「淋漓」については、春沢永恩「雁字」詩「欲爲蘇卿寫鄉信、湘江煙雨墨淋漓（蘇卿為らんと欲して郷信を写す、湘江の煙雨墨淋漓たり）」（翰林五鳳集所収）のようにたつぷりとした墨痕

を形容する例が多く、当該句の「写紙」を導く要素であったか。「薄情」の語は、『錦繡段』崔道融「長門怨」詩に「錯把黄金買詩賦、相如自是薄情人（錯りて黄金を把りて詩賦を買ふ、相如は自ら是れ薄情人）」と見える。「相如」すなわち司馬相如は、卓文君を妻としながら、茂陵に住む女に心引かれる。この時の浮気心が「薄情」と形容されている。当該句の「情猶薄」は、男の来訪が途絶えたということだけでなく、手紙に書かれた言葉を見ても、やはりそこには男の薄情さが表れている、とする。和漢聯句に、「花にかりねの枕、駢／写紙情弥薄（紙に写せば情弥いよ薄し）」（慶長九年九月和漢千句・第二・七三・梅心正悟）の類例が見られる。

【訳】（薄情な男の手紙を読みながら、床で一人涙を流す。）紙に綴られたその情は、やはり薄っぺらである。

#### 64 間。箎。若。悲。 箎を聞けば響き悲しむが若し 雲

【式目】雑

【押韻】悲（和訓押韻） 悲（カサシム）（漢和三五韻）

【注釈】底本、狩野本は二字目を「箎」とするが、「箎」「若」は共に仄声であり、平仄が合わない。天理本「箎」は平声で、意味の上からも適している。よって、「箎」に改めた。手紙を読むことで感じる悲しさを詠む前句に対し、当該句は「箎」を聴くことで感じる悲しさを詠むことで対句を構成している。「胡箎」は『韻府群玉』に「箎（胡人捲蘆葉吹之（胡人蘆葉を捲きて之を吹く））」（下平声六麻韻）とある通り、胡国の人が吹く蘆笛。『和漢朗詠集』晝に「泣胡城而百戦之師、胡箎未歇（胡城に泣いて百たび戦ふ師、胡箎未だ歇まず）」（四一七）、また

杜甫「遣懷」詩に「天風隨斷柳、客淚墮清箎（天風斷柳に隨ひ、客淚清箎に墮つ）」などの例がある。辺境の地で聞く箎の響きは、人に悲しみを催させるものとして詠まれてきたのである。和漢聯句でも「衣うつさとはいづくの秋深て／塞箎出霧酸（塞箎霧を出て酸たり）」（天文六年五月十日和漢聯句・九〇・高辻長雅）のように箎の音を詠む句が見られる。

【訳】（紙に綴られたその情は、やはり薄っぺらである。）箎の音を聞くと、その響きは悲しんでいるようだ。

#### （三折ウ）

65 ととむるもろこし舟の名残あれや

宰相

【式目】雑 名残（二句物①）

【注釈】胡箎を聞いて郷愁の思いを抱くという前句から、その地へ赴く「もろこし舟」を付けた。『連珠合璧集』は「もろこし舟」の付合として「松浦さよ姫」を載せており、これが当該句の典拠であろう。『万葉集』巻五には松浦佐用姫の伝説を元に山上憶良が詠んだ和歌（八七一）が残り、『歌林良材抄』はそれを次のように取り上げる。「松浦佐用姫領巾摩山事」とほつ人松浦さよ姫妻恋にひれふりしよりおへる山の名 憶良／右、欽明天皇の御時、大伴佐堤比古遣唐使にてもろこしへわたりける時、其妻さよひめ名残ををしみて、松浦山にのぼりて、さぬのひれをふり、其舟をまねきしによりてそれより其山をひれふる山と名づけ侍り。其事を山上の憶良がよめる也」（巻下・二）。また『万葉集』同巻には、「行く舟を振り留みかねいかにばかり恋しくありけむ松浦佐用姫」（八七五）と、大伴狭手彦の乗る舟を引き留めることができなかつた松浦佐用姫の無念を

思いやる歌も見える。「名残」は当該句において、まず「ながれ行此水上はなみだにて／名残ながむるよどの川舟」（永原千句・第五・九八・兼載）のように、舟が通った後に立つ波を指す「余波」の意を持つ。加えて、「面影の忘らるまじき別かな名残を人の月に留めて」（新古今集・恋三・一一八五・西行）などの、「眼前を去った人やものを想起させる余韻」の意をも持つと考えられる。「もろこし舟」が立てた波も、その舟（に乗っていた人）の余韻も、すっかりなくなってしまうたのである。当該句末尾の「や」は反語と解釈した。

【訳】（中国で胡人が奏でる胡笳は悲しく聞こえるという。）引き留めても、中国へ向かう舟は行ってしまい、その余波も残ってはいない。その舟（に乗っていた人）を思い出させる余韻も、もうどこにも残っていない。

## 66 富士のたかねもちかき海つら

【式目】雑 海（二句物②）

護

【注釈】「船↓海」（拾花集）、「唐↓大海の舟」（拾花集、竹馬集）。「もろこし」から日本を代表する「富士」が導かれている。

また、前句の「名残」から、舟の余波の立つ「海つら」を導いた。前句は松浦佐用姫の本説に依っていたが、当該句は前句「もろこし舟」が富士山を近くに見ながら航行すると付けた。おそらくは駿河湾や相模湾を行くのであろう。「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」（新古今集・冬・六七五・山部赤人、百人一首・四）、「清見潟富士の煙や消えぬらん月影みがく三保の浦波」（風雅集・秋中・六二二・後鳥羽院）のように、「富士」が「田子の浦」「清見潟」「三保」と

いった周辺の歌枕とともに詠まれる例も多い。「海づら」は『日葡辞書』に「Vnizura.ウミヅラ（海面）海の表面」。

【訳】（引き止めても跡形も無く行ってしまい、余波も残っていない）その唐舟が行くのは、富士の高嶺も近くに見える海上。

## 67 風渡る波のうき島雲晴て

【式目】雑

尹

【注釈】「浮嶋↓富士のね」（随葉集）、「浮嶋原↓ふじ」（竹馬集）、「浪↓沖津風」（拾花集、竹馬集）。「うき島」について、『歌枕名寄』には駿河国「浮島原」と陸奥国「浮島」を載せるが、寄合書にある通り、ここでは前句「富士のたかね」に駿河の「浮島原」を付ける。鎌倉時代の紀行文である『東関紀行』には次の記述がある。「浮嶋が原はいつくよりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へはるばるとながき沼あり。布を引けるがごとし。山のみどり影をひたして空も水もひとつなり。芦刈小舟所々に棹さして、群れたる鳥多く去り来たり。（中略）影うつす沼の入江の富士の嶺の煙も空に浮嶋が原」（『夫木抄』「ふじの沼」に同箇所が引用されている）。『東関紀行』に言う「はるばるとながき沼」に風が渡り、波が立つのである。「風渡る」は「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり」（新古今集・冬・六二五・西行）のように広く風が吹く様子。「雲晴て」は浮島原あたりの雲が風で払われたということであろうが、前句と付いた場合には「富士」にかかっていた雲が風で吹き払われる様であり、それによって富士が近く見えたというのであろう。加えて、浮島原の沼に富士の映る景を想定してい

たかもしれない。連歌に「ゆふなぎの田子の浦浪永日に／富士のうへこぐ舟のうき嶋」（応永二十七年七月二十五日賦何路連歌・六二・伏見宮貞成親王）の例がある。

【詠】風が吹き渡り、沼に波が立つ浮島のあたりの雲が晴れて（富士が近く見えた）。

68 遠望。境自知。遠望境自づから知る

【式目】雑

【押韻】知（和訓押韻） 知<sup>シ</sup>（漢和三五韻）

【注釈】前句の雲が晴れた景色に対して、それを眺めやる人物を付けた。「遠望」は遠くを望むことで、和漢聯句に「晴ても末やのこる夕ぎり／遠望浪字雁（遠望字を浪する雁）」（慶長九年九月和漢千句・第四・三七・梅心正悟）の用例が見出せる。

「境」はここでは景色の意。「谷深春漸到（谷深くして春漸く来る）／霞散境尤奇（霞散じて境尤も奇なり）」（天正十九年四月和漢千句・第五・七二・有節瑞保）は、霞が晴れて絶景が現れたことを詠んでおり、前句「雲晴て」から当該句への展開に類似した内容である。また「自知」はある物事について自ら知覚し理解すること。たとえば瑞深周鳳「就友人借書（友人に就きて書を借る）」詩「四十頭顱可自知、讀書未了淡生涯（四十の頭顱自ら知るべし、読書未だ了らず淡生涯）」（翰林五鳳集所収）など、五山僧にはよく用いられた語であった。

【詠】（風が渡り浮島のあたりの雲が晴れた。）遠くを望むと、その景色の全貌が見えた。

69 吟。筇遊。有以。吟筇遊ふこと以有り

雲

【式目】雑

【注釈】前句において勝景を眺めるのは、吟筇を携えて詩を作ろうとする人であると付けた。前句「吟筇」は詩人の杖、ここでは詩人が詩材を求めて杖を突き歩くこと。「筇」は『漢和三五韻』に「筇<sup>タケ</sup>」とある。「山したみちの袖のやすらひ／探景吟筇瘦（景を探れば吟筇瘦す）」（永祿七年二月二日和漢聯句・一一・雲叔周悦）。「遊有以」は『古文真宝』後集・卷三に載る李白「春夜宴桃李園序（春夜桃李の園に宴するの序）」の次の表現に拠る。「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。而浮生若夢、爲歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也（夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し、歡を爲すこと幾何ぞ。古人燭を乗りて夜遊びしは、良に以有るなり）。これに対し、笑雲清三は「サテコソ古人モ皆秉燭夜遊スルゾ」と付注する。古人が夜に灯をともしてまで遊んだのは、短い人生を、いっそ歡樂を享受して過ごそうとしたからだ、という。ただし当該句に言う「遊」は、一句の意味からすると、詩に詠むべき題材を求めて逍遙する意が強い。

【詠】（遠くの景色を望みながら）杖をつき遊吟するには、それなりの理由があるのだ。

70 陳曆。逝如斯。陳曆逝くものは斯くの如し 甫

【式目】冬一（陳曆）

【押韻】斯<sup>コソ</sup>（和訓押韻） 斯<sup>コソ</sup>（漢和三五韻）

【注釈】前句から対句で展開する。また内容の上では、「以」を具体的に時の移ろう速さとして句を付けた。「産衣<sup>ユキ</sup>」に「古き曆のなごいはず冬也」とあることから、当該句は冬である。

「陳曆」は漢詩文に用例が見出せず、かろうじて惟高妙安「梅花殘曆」詩「萬通千歳一陳曆、可愧書中不道梅（万通千歳一陳曆、愧づべし書中梅を道はざることを）」（翰林五鳳集所収）など五山僧による例が見られる程度である。「年明て開かぬ梅やふる曆」（崑山集・五）など俳諧に見られる「古曆」に類する言葉と考え、一年間使つて古くなつた曆の意ととる。「逝如斯」は『論語』子罕篇、「子在川上曰、逝者如斯夫。不舍晝夜。（子川の上<sup>は</sup>に在りて曰く、逝く者は斯くの如きか。晝夜を舍かず）」と、時間の流れの速さを述べた一節に拠る。つまり、「陳曆」を見て時間の流れの速さに気付かされたのである。また前句を踏まえると、吟遊するうちにあつという間に年月が経つたことも意味するのであろう。

【訳】（杖をつき遊吟するうちに歳月が経つた。）使い終わろうとする曆を見ると、このようにして歳月が過ぎていくのだと感ずる。

71をろかにもかさなる齡をとろへて

【式目】 雑 述懐（かさなる齡）

【注釈】「年の暮しなげく老の身」（拾花集、竹馬集。前句から歳暮述懐の句を付けた。「をろかにもかさなる齡」は、「うき物と思ひすつるを身に知て／わがをろかにも過しいにしへ」（永原千句・第八・三二・祥祈）などにも見えるように、何かに勤勉に取り組むことも無く徒らに歳月を送ることを言う。また、「愚かにてつとめぬ身には行く年を惜しと言ふべき理もなし」（基綱集・一四五・惜歳暮）など、年の暮れは、無為に過ぎした時間を省みる機会ともなる。「齡をとろへて」は、「我が齡衰

へゆけば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ」（新古今集・恋五・一四二七・よみ人しらず）のように年老いること。「かさなる齡」と「をとろへて」は意味がやや重複するか。

【訳】（曆は古くなり、歳月は過ぎた。このようにして）うかうかと年を重ね、身は老いて。

72歳。六●緑●毛●龜● 六を蔵す緑毛の龜

化

【式目】 雑

【押韻】 龜（和訓押韻） 龜カメ（漢和三五韻）

【注釈】前句「かさなる齡」に「龜」を付けた。「岩のうへをもたのむ世中／限りなくいけるを龜のよはひにて」（美濃千句・第一・六九・專順）。前句との付合の典拠は『莊子』秋水篇の次の寓話である。楚王が使者を派遣して莊子に仕官を要請したところ、莊子は自らを、泥中に尾を引く龜に例え、「往。吾將曳尾於塗中（往け。吾將に尾を塗中に曳かんとす）」と答えて要請を断つたという。単に老後を述懐する前句に対して、当該句を付けることで、長命を保つことを肯定的に取りなした。

「蔵六」は龜が頭・尾・四肢を甲羅に隠すこと。古く『雑阿含經』卷四十三に「龜蟲畏野干、藏六於殻内（龜虫野干を畏れ、六を殻内に蔵す）」とある。和漢聯句の用例として「葉多蓬島遊（葉多くして蓬島に遊ぶ）／六蔵龜出曝（六蔵龜出でて曝す）」（天文二十四年三月二十五日和漢千句・第五・四五・高辻長雅）が挙げられる。「緑毛龜」は「木の芽はる春の緑の毛衣の龜の住むまで澄める池水」（称名院集・一一八一・池水久澄）のように、長寿の龜に緑毛が生じたものを言う。なお、本百韻では作者を空白とする句は十二句あり、そのうち42句と62句は漢句

である。一方、句上から、後陽成院が詠んだのは和句十句であったことが分かる。よって、作者名が空白である前句(71句)は後陽成院御製と考えられる。この時、院は三十歳ではあるが、「をろかにもかさなる齡」という述懐の句を詠み、それに対して玄興が肯定的に取りなしたと見ることもできる。

【訳】首尾手足の六つを甲羅に隠す、緑毛を背負った亀(は長命を保つ)。

### 73 昔のむす岩ねの水の底清み

【式目】 雑

然

【注釈】「亀↓いはほの上」(連珠合璧集)。亀が長寿を意味することから、長い年月を経て苔生した岩を付けた。和歌では、「亀の尾のたぎつ岩根にむす苔の上散る玉は千代の数かも」(為家千首・八二九)のように、しばしば京都市西部の亀の尾山(亀山)を詠む中に、長寿の「亀」の意を含ませる。「岩ね」は『日葡辞書』に「Iane:イワネ(岩根) 岩、あるいは、岩塊。詩歌語」とある。「岩ねの水」は、「閑繫弄蹄駒(閑繫蹄を弄する駒)／あふ坂や岩ねのながれそすみて」(慶長十三年七月二十八日和漢聯句・八三・昌琢)など、岩間から湧く水のことを言う。「底清み」は水が澄んで底まで見える様。

【訳】苔生す岩根から湧き出す水の底は清い(そのあたりには亀が住んでいる)。

### 74 暁をきの山寺の月

【式目】 秋1(月) 釈教1(山寺)

日野

【注釈】「あか汲↓暁起出る」(随葉集)、「苔↓古寺の道」(拾

花集)、「苔↓古寺の庭」(竹馬集)、「岩↓古寺の道」(拾花集、竹馬集)。清らかな「岩ねの水」を詠む前句に対して「月」を付け、水に月が映っている様を詠んだ。また、「絶えず汲む閑伽井の水の底澄みて心に晴るる有明の月」(新千載集・釈教・八六四・覚助法親王)や、「あらまし叶墨ぞめの袖／月を汲むあかつきをきの阿伽の水」(応永二十九年三月二十八日賦何人連歌・二三)といった例に鑑みれば、早朝に有明の月の映った水を閑伽水として汲む人物も読み取れる。「暁をき」は早朝に起きる様をいい、「寒きよの暁起も怠らで／月をも友と閑伽をこそくめ」(熊野千句・第九・三二・細川勝元)のように朝の勤行のために閑伽水を汲む様子も頻りに詠まれる。

【訳】早朝に起きて見る、山寺の上にかかる月(苔生した岩間から湧き出る清水を汲むと、そこには月が映っている)。

### 75 易。狎。聴。經。鹿。 狎れ易し聴經の鹿

節

【式目】 秋2(鹿) 釈教2(經) 鹿(三句物①)

【注釈】二字目は底本をはじめ諸本「狎」に作るが、句意によつて「狎」に整定した。「鹿↓澄月」(拾花集、俳諧類船集)。山寺での読經の声を聞く鹿の様子を付けた。鄭谷「慈恩偶題」詩「林下聽經秋苑鹿、溪邊掃葉夕陽僧(林下經を聴く秋苑の鹿、溪辺葉を掃ふ夕陽の僧)」「三体詩所収」を踏まえたもので、『三体詩素隱抄』に「アソコナル秋苑二鹿ガ臥テミヘタルハ、僧タチノ經ヲ誦誦セラル、声ヲ聞ケンゾ」とある。そのように人に親しむ鹿を「狎」とする例には「霜前山已黃(霜前山は已に黄なり)／柴扉常狎鹿(柴扉常に鹿に狎る)」(文明十七年十月二十日和漢聯句・八三・天津)などがあるが、やや和習的な表現。

「訪へかしと思ふ人だにも来ぬ庵に鹿立ち馴るる秋の夕暮」（拾玉集・三九五〇）のような和歌的表現に引かれたものと思われる。

【詠】（暁方の山寺を月が照らすころ、）人に馴れている鹿は、読経の声を聴きに来る。

76 催。帰。通。簡。鷓。 帰るを催す通簡の鷓 心

【式目】秋3（句意） 簡（三句物①）

【押韻】鷓（和訓押韻） 鷓ツバメ（漢和三五韻）

【注釈】対句で展開した。天理本は「鷓」に左訓「クロトリ」を付す。「クロトリ」は「玄鳥」（『詩経』商頌「玄鳥」に見える燕の異名）のこと。秋の三句目なのでこゝは日本を發つて南へ帰る燕をいう。「催帰」は、帰郷の情が生じることをいい、和漢聯句には「幾重かは雲のあなたの月ならむ／催帰秋浦船（帰るを催す秋浦の船）」（元和八年五月二十六日漢和聯句・四・英岳景洪）の例がある。「簡」は前句「経」と対を成すことから手紙を指すと考えられる。「かはす中にも残るむつこと／艶簡開封尚（艶簡封を開きて尚し）」（慶長四年六月二十八日漢和聯句・六七・清原秀賢）など、和漢聯句には例が多い。「通簡」は、手紙を届けること。当該句は「鷓」が「通簡」の主体であり、それを文字通り燕が手紙を運んでいると解釈することもできようが、「帰る雁にちがふ雲路の燕細かにこれや書ける玉章」（西行法師家集・三〇）のような歌例から推せば、南へ帰る燕を文字（手紙）に見立てたものとも理解できる。いまにわかには雁の手紙を燕が持ち帰るという理解もありうるかもしれない。

い。当該句のように燕が手紙を運ぶ例は珍しく、これは秋雁（一座一句）が8句に既出であることと関連があるろう。

【詠】（人に馴れている鹿は、読経の声を聴きに来る。）手紙を届ける燕は、帰郷の情を催す。

77 宿。花。遭。頗。妬。 花に宿れば頗る妬まる 圃

【式目】春1（花） 恋1（妬） 宿（二句物②）

【注釈】前句の「鷓」を春に飛来する燕と解した。季移り。白居易「上陽白髮人」の「宮鶯百轉愁厭聞、梁燕雙栖老休妬（宮鶯百轉するも愁ひては聞くを厭ひ、梁燕双栖するも老いては妬むを休む）」から「遭頗妬」を導いた。「燕↓巢ねたむ」（連珠合璧集）。「遭」は受身の助字。『倭玉篇』に「遭サワラフ」とあり、和漢聯句にも「あたゝめ酒をくめるたび／吟魂遭月役（吟魂月に役さる）」（慶長三年正月二十日漢和聯句・七五・妙意）のような例がある。「宿花」は、ここでは春の花に宿ること。「いづよりも深きねたみと成けらし／花をねぐらの鳥のさえづり」（元龜二年三月五日千句・第三・五四・丁亥）は、「上陽白髮人」の詩句を踏まえつつ、鶯が花に宿ることにより妬みがさらに深まるとする。当該句も同様に、ただでさえ妬ましい存在である燕が美しい花に宿るので、いっそう（頗）その思いが募ることを詠うのだろう。当該句は折端の直前にあって花の句を出す必要がある、「宿花」はそれに対応する面もある。

【詠】花に宿ると、たいそう妬まれる（ので、燕は故郷へ帰りたいと思う）。

78 うらむる心のどめかねたる

【式目】春2(のどめ) 恋2(うらむ) うらむる(二句物)

① のどめ(一句物)①

【注釈】前句「妬」の主体の様子を詠む。「花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ」(古今集・春下・七六・素性)を句寄せた付け。『産衣』に「長閑 一也。のどむるも長閑の内也」とあり、「のどめかね」は春季。「のどむる」は、「数ならぬ恨みをなみにのどめても心碎くる海人のまてがた」(草根集・八五〇一)とあるように、恨みなどの感情を鎮める意。「かね」は、そうしたいと思っても本人の意思によつては遂行が困難であることを含意する。「明けはつるかの春の後朝／逢ふときも心のどめぬ恨みにて」(大原野千句・第六・二七・宗仍)は、春の句において恋人への恨みを抑えがたいことを「心のどめぬ」と表現する類想句。当該句は、男が花に宿り、自分のもとを訪れないので、花を恨めしく思う女の心情を詠うものか。なお、『連歌新式』は「うらみ(うらむ)」を一座二句物に掲げるが、『連歌新式増抄』は「こひ二つのほかに又あり」とし、『産衣』は一座三句ないし四句とする。

【訳】(花に宿ると、たいそう妬まれる。嫉妬をする人は、相手を)恨む心をのどやかにしがたい。

(名折才)

79 なきとがを云かすむるにまかせ来て

【式目】春3(云かすむる) 釈教(とが)

高

【注釈】「かすむる」は、「掠ると云詞 いひ掠る、かすめしらせてなど春也」(産衣)より春季。「ぬれぎぬしみをうらむる」(随葉集)、「長閑↓四方のかすむ」(随葉集、拾花集、竹馬集)。

恨みを「のどめかね」た人によつて着せられた濡れ衣を甘受するさまを付けた。「いひかすむ」は、言葉の上で誤魔化すこと。

和歌に「恨めしや言ひ掠めては光ある玉もかひなき袖の上かな」(称名院集・一二三五)、連歌に「摘むもまたたまらぬ程の若菜にて／数ふる年もいひかすめばや」(飯盛千句・第九・六六・宗養)があるが、やや珍しい語。『日葡辞書』に「Togano iyasunnu. (科を言ひ掠むる) 罪科を言いまざらかす、あるいは、言いのがれる」の例を引く。当該句は「なきとが」を目的語とするので、無実であるのに過失があるかのように言い立てることをいう。「寵与花容盛(寵は花容と与に盛なり)／うらみのどめてたのむ媒／つみなきをいひかすめしもはるけばや」(天正十九年四月和漢千句・追加・一七・広橋兼勝／一八・四辻季満／一九・近衛信尹)は、展開が本百韻と似る。前句を濡れ衣を着せられた人の心情と解する余地もあるが、次句への展開を勘案して採らない。なお「とが」は釈教の詞であるが、句意には関わらない。

【訳】(恨みを鎮めることができずにいる人が、私のことを)無実であるのに過失があるかのように言い立てるのを、そのままにしておいて。

80 世のさがとのみ過す身もうし

【式目】雑 述懐(身もうし・世) 世(五句物)②

然

【注釈】前句の「なきとが」すなわち濡衣を着せられた人物の思いを付けた。「世のさが」は世の中の習い。「我が庵は都のいぬる住み侘びぬ憂き世のさがと思ひなせども」(拾玉集・五一・一二)のように、多く「憂き世のさが」の形をとり、和歌では



主に人の命のはかなさや、男女の仲について用いられる。ここでは、「爰もこれうき世のさがと住侘て／山ちはるかにかへる里人」(老耳・二八二八)のように、「世の中はそのようなものだと思つて(過ごす)」の意。「のみ」は、本意な状況をただ世の習いと思ひさだめて暮らすさまを強調する表現で、その鬱屈した心情が「身もうし」に込められる。連歌では「よもぎがすゑの露のふる道／虫のねもうき世のさがの奥にきて」(享徳千句・第十・一五・宗砌)のように、しばしば「嵯峨」との掛詞となり、当該句でも句意とは深く関わらないものの、次句への展開における布石となっている。

【訳】(人が無美の罪を言い立てるのを、そのままにしておく。それを)世の中の習いとばかり思ひなして過ごす、我が身の辛いことよ。

## 81 朝夕に聞も嵐の山がくれ

【式目】雑 嵐 (二句物②)

【注釈】前句の人物が隠棲する場所を見定めた。「隠家↓嵯峨の奥」(拾花集、竹馬集、俳諧類船集)。「嵯峨↓あらし山」(俳諧類船集)。「世の」さが「嵐の山」(嵐山)を発想する例には、「うき世のさがのおくのさびしさ／此夕あらしの山の風もなし」(文明十四年万句・第四十句・第二・五九・通覚)がある。「山がくれ」は、隠者の住まう山中の閑居をいい、「行く春の日数に余る花もなし山隠れまで誘ふ嵐に」(文保百首・二七一六・覚助法親王)のように、強い山風が吹く場所として詠まれることが多い。当該句の「嵐の山」は「音も嵐の山などゝ、吹心の句作り」(産衣)であり、地名に嵐の音が荒い意を

尹

掛ける。助詞「も」は、朝方と夕べにはその音がとりわけ荒々しく聞こえることをいうのだろう。「山里は世の憂きよりも住み侘びぬ殊の外なる峰の嵐に」(新古今集・雑中・一六二二・宜秋門院丹後)のように、嵐は侘び住まいの辛さを増すものであり、前句の「うし」と呼応する。なお、「嵐」は「連歌新式」の「一座一句物」に掲出されるが「近年為二句(近年二句と為す)」と注記される。

【訳】(世の習いとばかり思ひなして過ごすこの身の辛いことよ。)朝夕に聞くにつけても嵐の音が荒々しく響く、嵐山の閑居。

## 82 残る木の葉もちりやはつらむ

【式目】冬1 (木の葉)

【注釈】底本「はつむ」を天理本「はつらん」により校訂した。

前句の嵐の音から、木に残る葉が散り果てたであろうことを推測する。「嵐↓木葉」(拾花集)。嵐が木葉を吹き尽くすさまは、「嵐吹く峰の木葉は散り果てて影もたまらぬ山の端の月」(洞院撰政家百首・一七三〇・藤原成実)などに詠まれる。嵐山の木の葉が「ちりはつ」例には、「散り果てて木の葉隠れもあらし山ふもとの川に凍る月影」(嘉元百首・二五二・鷹司基忠)がある。「らむ」は、前句と付いたときは、庵中で嵐の音を聞いた人が、戸外では木の葉が散りはてしてしまっているであろうと推測する働きを担う。「冬は来ぬとや木の葉ちるらん／音かはるときはの杜の嵐山」(宝徳四年千句・第六・八六・専順)と同想の付けで、冬の到来を思う心がある。

【訳】(朝夕に聞くにつけても嵐の音が荒々しく響く、嵐山の

閑居。庵の外では)残っていた木の葉も、すっかり散り果てしまっていることだろう。

### 83 臘鼓・凍禽噪 臘鼓凍禽噪ぐ

心

【式目】冬2 (臘鼓・凍)

【注釈】前句の落葉を推測する根拠として「臘鼓」と「凍禽噪」とを付ける。「臘鼓」は十二月八日(臘日)に厄払いのために打つ鼓。『荆楚歲時記』に「十二月八日爲臘日。諺言、臘鼓鳴、春草生。村人並擊細腰鼓、戴胡公頭、及作金剛力士、以逐疫、沐浴轉除罪障(十二月八日を臘日と爲す。諺に言ふ、臘鼓鳴りて春草生ずと。村人並細腰鼓を撃ち、胡公頭を戴き、及び金剛力士を作り、以て疫を逐ひ、沐浴して罪障を転除す)」。『太平御覽』卷三十三・時序部・臘にも「東夷列傳曰、三韓俗、以臘日家家祭祀。俗云、臘鼓鳴春草生也(東夷列伝に曰く、三韓の俗、臘日を以て家々祭祀す。俗に云ふ、臘鼓鳴りて春草生ずるなりと)」とある。「凍禽」は宋代以降に用いられた詩語(小島憲之『日本文学における漢語表現』岩波書店、一九八八年)。「噪」は鳥が群がり鳴く意であり、凍えた鳥がそのように鳴くさまとして、「いまよりの衣手さむき初霜に／雀凍噪荒田(雀凍りて荒田に噪ぐ)。(天文二十三年六月二十五日和漢聯句・一〇・三条西公条)の例がある。当該句で鳥がここえて騒ぐのは、前句で木の葉が散り果てたために、ねぐらが失われたことによるのだろう。

【訳】臘鼓が鳴り、凍えた鳥たちが騒ぐ。(残っていた木葉は散りはててしまっていることだろう。)

### 84 波にかたよるをし鴨の声

新宰相

【式目】冬3 (をし鴨) をし(一句物①)

【注釈】前句の「凍禽噪」を水辺の鴛鴦と見定めた。「水↓鴛鴨」(拾花集、竹馬集、俳諧類船集)、「鼓↓浪」(俳諧類船集)。「波にかたよる」は、「春風に柳や岸を払ふらん波に片寄る池の鴛鴦」(秋篠月清集・五〇五)のように、波に揺られて水上のものが一方によること。当該句は右の歌を本歌とし、波に浮かぶ「をし鴨」とともに、その「声」までが「かたよる」とした。「をし鴨」は、鴛鴦を指す説と、「をし」と「鴨」という説との二説があり、『高松重季聞書』には「能正云、連歌にはをしかもといふに、をしと鴨との事をいふにあらず。をしかもといひてやはりをしの事也」という能正の説と、「此事老父にはなし侍るに、(中略)正説は、をしかもは鴛と鴨との事也」という「老父」(武者小路実陰)の「正説」とが挙げられる。『拾花集』「鴛」条が派生語として「鴛鴨のこゑ」を挙げることから、当該句では鴛鴦のことと解した。

【訳】(臘鼓が鳴り、凍えた鳥たちが騒いでいる。)波とともに一方に片寄る鴛鴦の声。

### 85 はる、と蘆べをかけてみつしほに

日野

【式目】雑 しほ(三句物①)

【注釈】「をし鴨」のいる場を入江と見定め、前句で「波」が生じる理由を満潮と解した付け。「浪↓みつ汐、芦のほ末」「をし↓かるゝ芦べ」(拾花集)、「鴛↓芦べ」(俳諧類船集)。当該句は「和歌の浦に潮満ちくれば濁をなみ蘆辺をさして田鶴鳴きわたる」(古今集・仮名序・山部赤人)を踏まえたもの。同じ

本歌を踏まえ、かつ潮が遠くから満ちてくるさまを「はるぐ」と表す例に「はるぐ」と蘆べをさしてみつ塩に／みるぐ／ちかきあまのつり舟（宗牧独吟千句・第二・六〇）がある。「みつしほ」は満潮をいう歌語。早く『古今集』に「満つ潮の流れひる間を逢ひがたみみるめの浦によるをこそ待て」（恋三・六六五・清原深養父）がある。「蘆べをかけてみつ」は蘆辺に向かつて潮が満ちることをいう。「なみやこゆらんすゑのうきはし／あまのすむ礧山かけてみつ塩に」（石山千句・第一・十一・宗養）。「蘆辺全体にわたって」と解する余地もあるが、ここでは「はるぐ」とを彼方から潮が満ちる意と解するので、採らない。

【訳】はるばると蘆辺の方へ向かつて潮が満ちてくる。（波とともに一方に片寄る鴛鴦の声。）

### 86 浮沈舟不涯 浮沈舟涯らず

【式目】雑 浮（四句物③）

【押韻】涯ホトリ（漢和三五韻）

【注釈】「船↓しほどき」（竹馬集）。潮が満ちることにより船が浮きつ沈みつすると解した。「不涯」は限りのないこと。和習的な表現であり、漢籍には殆ど見当たらないが、九鼎竺重「招河南故人」詩「南望超超情不涯、洛京春色正繁華（南望超々として情涯らず、洛京の春色正に繁華なるべし）」（翰林五鳳集所収）など、五山の漢詩に用いられる。和漢聯句にも「待わぶる夜半も程なく明そめて／依君恨不涯（君に依りて恨みは涯らず）」（文明十四年三月二十六日漢和聯句・三四・宗山等貴）の例があり、『文明十四年三月二十六日漢和百韻譯注』（勉誠出版、二〇〇七年）の

### 圃

当該句注（大谷雅夫執筆）は、「韻字として「涯」を用いる必要があり」、かつ二四不同を守るために「平声の「無」ではなく仄声の「不」が用いられた」ことを指摘する。当該句についても、同様の事情があったものと推察される。

【訳】（はるばると蘆辺のほうへ向かつて潮が満ちてくる。）船はいつまでも浮きつ沈みつし続ける。

### 87 虚名無住網 虚名網に住まること無し

【式目】雑 住網（虚名網に住まること無し）

【注釈】底本「佳網」（二字とも平声）に作るが、平仄と句意より天理本「住網」を採る。言葉の縁で、前句の「舟」から「網」を導く。前句から『莊子』列禦寇篇の「無能者無所求、飽食而遨遊。汎若不繫之舟、虚而遨遊者也（無能なる者は求むる所なく、飽食して遨遊す。汎として繫がざる舟の若く、虚にして遨遊する者なり）」を発想した付け。一切の欲望から解放された者は、気ままに「繫がざる舟」のごとく、自己を捨てて自由な境涯に遊ぶという『莊子』の本文に拠って前句を理解し、超俗的な生き方を描く句へと展開した。「虚名」は、名声が実体的でないものであること。「虚名トハ、真実ノ徹底ハナケレドモ、何トヤラシテ名ガ有」（兩足院本山谷抄）。また、「網」は、陶淵明「歸園田居」五首其一に「誤落塵網中、一去三十年（誤りて落つ塵網の中、一たび去つて三十年）」（古文真宝・前集所収）とあるように俗世を指す。「いひやのがれむおほけなき中／世惹虚名幾（世は虚名に惹かること幾ばくぞ）」（元和二年正月十二日漢和聯句・三七・後陽成院）のように、世間では名声という実体的ないものを重視するが、そのようなところに留まる

ことなく、波にただよう舟のごとき自適の境地に遊ぼうというのである。

【訳】 名声は実体のないものであり、(そのようなものもてはやされる) 俗世間に留まることはない。(その人は、浮沈しつづける船のごとき自由な境涯にある。)

## 88 清涙益長糸。清涙益と糸を長くす

甫

【式目】 雑

【押韻】 糸(和訓押韻) 糸イ(漢和三五韻)

【注釈】 対句で展開した。「清涙」は呉菊譚「留別」に「手彈清淚向離筵、殘日依依上客船(手に清涙を弾じて離筵に向かふ、残日依々として客船上る)」「聯珠詩格所収」の例がある。「涙」を「糸」にたとえる例は『玉台新詠』卷七「代蘇屬國婦(蘇屬國の婦に代る)」に「帛上看未終、眼下淚如糸(帛上看ること未だ終らず、眼下涙糸の如し)」。唐詩にはこれに似た例は見られないが、和漢聯句には「取かはす扇を中の形見にて／恨添涙線長(恨み添ひて涙線長し)」「慶長十四年三月二十九日漢和聯句・五八・元廣」など、同様の表現をいくつか見出せる。

【訳】 (名声は無意味なものであり、) 清らかな涙の糸はますます長くなるばかりだ。

## 89 ぬぎかへんかぎりもいさや藤衣

【式目】 雑

【注釈】 前句の「清涙」の理由として、「藤衣」をまといて喪に服すさまを付けた。「限りあれば今日脱ぎ捨つ藤衣果てなきものは涙なりけり」(拾遺集・哀傷・一二九三・藤原道信)を

ふまえた付合であろう。「藤衣」は喪服。『産衣』に「又哀傷也。

更るとしても夏に非ず(三年用て後ぬぐ也)」とある。また、『随葉集』恋部「名残をしたふ」の項に「藤衣とは親の後にきるふくのことなり」。「いさや」は「さあどうだか(わからぬ)」の意。喪服は通常三年で「ぬぎかへ」るが、ここではその年限もわからぬほど死別を悲しむ様子を詠んだ。「かぎり」は『日葡辞書』に「Cagiri:カギリ(限り) 限界、または、終末」とある。すなわち喪が明けて「藤衣」を脱ぐ時の意。なお、前句の「糸」と「衣」は縁語である。

【訳】 (涙の糸は長く、) これを脱ぐ時がいつになるか、とてもわからない藤衣よ。

## 90 至孝道非私。至孝道私に非ず

節

【式目】 雑

【押韻】 私(和訓押韻) 私シ(漢和三五韻)

【注釈】 前句の「藤衣」を「至孝」によって親の喪に服す様子と解して付けた。一句は『孟子』万章上篇に「孝子之至、莫大乎尊親。尊親之至、莫大乎以天下養。爲天子之父、尊之至也。以天下養、養之至也。(孝子の至りは、親を尊ぶより大なるは莫し。親を尊ぶの至りは、天下を以て養ふより大なるは莫し。天子の父爲るは、尊ぶの至りなり。天下を以て養ふは、養ふの至りなり)」とあるのによるか。孝行は天下を治めることに繋がるという『孟子』の内容を踏まえ、「道非私」、すなわち自分本位の道ではないとした。「至孝」は孝のもっともすぐれたもの。「古文孝經序」に「至孝之自然、皆不待論而寤者也(至孝の自然なる、皆論すを待たずして寤る者なり)」と見える語で

ある。

【訳】(喪服を脱ぐ時も決めかねるほどに) 孝行を尽くすことは、自分一人の道ではない。

91 滲水月何隔 水に滲むるに月何ぞ隔てん 集雲

【式目】秋1(月)

【注釈】「滲水」は見慣れない表現であるが、「滲」は「浸」に通じる。すなわち『集韻』の「滲」の項に「與浸同。浸淫漸漬也(浸と同じ。浸淫漸漬するなり)」とあり、ひたす、しみこむの意である。そして、白居易「琵琶行」「別時茫茫江浸月(別時茫茫として江月を浸す)」「古文真宝・前集所収」のように、月が水面に映ることを「浸」と表現することがあった。たとえば五山文学には蘭坡景藍「洞庭秋月」詩「碧潭唯浸半輪影、不及洞庭湖水寬(碧潭唯だ浸す半輪の影、及ばず洞庭の湖水の寬きに)」「翰林五鳳集所収」のような例が見られる。以上から考えると、当該句の「滲水」も月が水に映る情景を表すのではないか。「月何隔」は月の光を遮るものが何もないさま。蘇軾「和黄龍清老」三首其一に「萬山不隔中秋月、一雁能傳寄遠書(万山隔てず中秋の月、一雁能く伝へて遠書を寄す)。また、慶長九年九月四日和漢聯句に「たが住なしてかふ一むら/宮野月無隔(宮野月隔てなし)」(第七・六三・梅心正悟)の例がある。前句との関係では、「私」ならざる「至孝」の道があまねく人のためになることを、月光が分け隔て無く照らす様子になぞらえたか。

【訳】水に映った月は、どうしてその光を隔てるものがあるろうか(それは私ならざる至孝の道のようにである)。

92 霧立きゆるあふ坂の山

【式目】秋2(霧)

【注釈】「霧のはる、↓月のさやか」(随葉集)、類似する付合としては「入日さす外山のすそに霧晴て/出んま遅くおもふよの月」(熊野千句・第九・七六・常安)がある。「立きゆ」は一般的には霧や煙が立ち込め、消えることを指す。ただし前句と付く場合には「雲たちきえよ月をまち見ん/うき秋もまよひとなりぬ胸のうち」(表佐千句・第二・二一・宗祇)のように、月が見えるようになった理由を「霧たちきゆる」としたのであって、ただ単に霧が消えることを表すと考えられる。加えて、前句の「水」を近江・京都間の関所である逢坂の歌枕「関の清水」ととりなしたか。「関の清水」については『無名抄』に「逢坂の関の清水と云ふは、走り井と同じ水ぞと、なべて人知りて侍り。しかあらず。清水は別の所にあり。今は水もなければ、そこと知れる人だになし」の記述があり、すでに旧跡となっていた。逢坂の「霧」は和歌に「晝の関の秋霧立ちこめて都隔つる逢坂の山」(続千載集・羈旅・八三一・持明院基行)の例があり、『竹馬集』にも「逢坂ノ霧」とある。

【訳】立ちこめていた霧が消える逢坂の山(では、何にもさえずられずに月が輝いている)。

(名折才)

93 色になる音羽の木末明はて、

【式目】秋3(色になる音羽の木末) 木末(二句物①)

【注釈】音羽山は逢坂山に連なって近江と京の境に位置する山である。「音羽山↓相坂」(随葉集)。また、同じく『随葉集』に「霧のたつ↓梢の色もわかぬ」とある通り、霧は木々を隠す。

然

護

ここでは逆に、霧が晴れて「梢の色」が見えるようになったと詠う。さらに、「明けわたる山本遠く霧晴れて田面あらはに秋風ぞ吹く」(新拾遺集・秋下・四七五・小倉公雄)など、夜が明けるとともに霧が晴れるという情景も和歌・連歌に頻出する。夜が明け、霧が晴れて、くまなく見える音羽山の紅葉を詠んだ句である。「色になる音羽の木末」は「秋風の吹きにし日より音羽山峰の梢も色づきにけり」(古今集・秋下・二五六・紀貫之)を踏まえた表現で、音羽山の木々が紅葉するさまを表す。

【訳】紅葉して色づいた音羽山の木々の梢のあたりは、すっかり夜が明けて(逢坂山では、その梢の色を隠していた霧も晴れる)。

#### 94 咲そひけりな花のしら雲

【式目】春1(花)

【注釈】「音羽↓花」(竹馬集)。秋から春への季移りで、前句の「色になる」を花が咲く様子に取りなした。これに似た展開に「かしらにわたる秋かぜの音/色になる草の庵りはさびしくて/とふ人かへる花はしら雪」(永祿石山千句・第三・四六・元理/四七・景恵/四八・能哲)がある。ここでは、山に咲く桜が、山にかかった白雲のように見えると詠む。「桜花咲き添ふままに白雲の重なる山に匂ふ春風」(続古今集・雑上・一五一八・祝部成賢)にあるように、花が「咲そふ」、つまり日増しに咲き増していき、そのさまがまるで白雲が重なっていくかのように、というのである。

【訳】(すっかり夜が明けて、夜のうちに花が咲いた音羽山の

木々の梢がはつきり見えるようになった。見れば昨日よりもいつそう花が白雲のように咲いたことだなあ。

#### 95 処々霞如錦 処々霞錦の如し

【式目】春2(霞)

園

【注釈】「霞↓花にほふ空」(竹馬集)。一句で読めば「あちこちに立つ霞は錦のようだ」の意で、「霞」は実景となるが、前句に付いた場合には「花」の見立てとなる。つまり、「錦のように美しい霞」は、実は「花のしら雲」であったというのである。「霞如錦」のように霞を錦に例える表現は、白居易「秋日與張賓客、舒著作同遊龍門醉中狂歌、凡二百三十八字(秋日張賓客、舒著作と同に龍門に遊び酔中狂歌す、凡て二百三十八字)」の「嵩峯餘霞錦綺卷(嵩峰の余霞錦綺卷く)」をはじめとして漢詩に少なくない。なお、前句との付合に際しては、「雲ならぬ霞も花の面影に匂ふばかりのみ吉野の山」(通勝集・二)のように花を霞に見立てる発想、および「林中花錦時開落(林中の花錦は時に開落す)」(和漢朗詠集・春・春興・二三・島田忠臣)のように花を錦に見立てる発想が影響している。

【訳】あちらこちらで、霞(白雲のように咲いた花)がかかり、錦のようだ。

#### 96 まじはる袖も九重の春

【式目】春3(九重の春)

伊

【注釈】「霞の衣↓九重の内」(竹馬集)。「九重」と「霞」が付く例に「九重のうちこそ春も春ならぬ霞にとづる廬のさびしさ」(羽柴千句・第五・五八・宗由)がある。「九重」は『日葡

辞書』に「Cocomye: コノエ (九重) Miyaco. (都)」とあるように、「都」の意。また『謡抄』田村に「九重の春 都の春也」との注が付される。ここでは「立ち渡る乙女の袖も九重の御階の霜や冴え増さるらん」(宝治百首・二二七二・土御門院小宰相)と同じく、「袖」をいくつも重ねることと、都の「九重」とを掛けるのである。連歌には「九重の袖」という表現がしばしば見られる。当該句に類似する付合としては「はるになりたるこのへのうち／かすみにやまじはるそではあかざらむ」(天正二年六月十日賦初何連歌・五九・愛綱)が挙げられる。右の例にもある通り、「まじはる袖」は人々が袖を連ねて春を楽しむ様子。なお前句の「錦」と「袖」は縁語である。

【訳】(あちこちじで、春霞が錦のようにかかっており)、人々が袖を連ねて都の春を楽しんでいる。

### 97 軽。颯。成。舞。蝶。

【式目】春4(蝶)

#### 節

軽颯舞を成す蝶

【注釈】前句との関係は、「うたのむしろの春のまじはり／袂 軽胡蝶舞(袂は軽し胡蝶の舞)」(永祿九年九月十日和漢聯句・七九・仁如集堯)のように蝶の羽を袖にたとえたものか。また、前句の「袖」と「舞」は縁語。ここでは九重の春を楽しむ人々と同じく、蝶も袖を交えるように飛び交っていると詠む。「軽颯」は蘇軾「和陶詩 和胡西曹示顧賊曹(胡西曹に和して顧賊曹に示す)」に「長春如稚女、飄搖倚輕颯(長春稚女の如く、飄搖として軽颯に倚る)」の例があり、「そよ風」の意。

【訳】(九重の春を楽しむ人々は袖をまじえ、)蝶がそよ風に乘って舞う。

### 98 吹風ゆるき野への若草

高

【式目】春5(若草)

【注釈】『産衣』に「風ゆるき 春に非ず」とあることから、「若草」によって春季をとる。『拾花集』に「こてふには長閑成野」とある通り、本句では胡蝶の舞う場所として「吹風ゆるき」のどかな春野の情景を付けた。「風」と「胡蝶」とを付ける例では「露かけて花のおもはん風もなし／胡蝶ぬるにも靡く若草」(池田千句・第九・二・成充)に近い。なお、前句との関係において、本百韻の4/5句「胡蝶みだるゝ野辺の朝風／霞外青々草(霞外青々たる草)」と趣向がやや重なる。また前句の「軽颯」と「吹風ゆるき」は指合である。

【訳】風がゆるやかに吹く野辺の若草はなびいている(その風に乗って蝶が舞っている)。

### 99 雨。多。民。借。潤。

心

【式目】雑 雨(二句物②)

【注釈】「若草↓野に春雨のふる」(随葉集)。前句「若草」を「雨」によって萌え出でるものとし、それだけでなく「民」も恵みを受けているだろう、と付けた。同じような内容を詠んだ和歌に「いつしかと今日降りそむる春雨に色づきわたる野辺の若草」(新勅撰集・春上・六・二条皇太后宮肥後)の例がある。また『論語』顔淵篇に「君子之徳風。小人之徳草。草尚之風必偃(君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を尚ふれば必ず偃す)」とあるのを踏まえ、前句の風を君子の徳、若草を小人すなわち民に読みかえて、当該句を付けている。「借潤」は蘇軾「次韻孔文仲推官見贈(孔文仲推官の贈らるるに次韻す)」

に「憐我枯槁質、借潤生華滋（我が枯槁の質を憐れみ、潤ひを借り花滋を生ず）」とあるように、雨などの恩恵を蒙ること。  
【訳】雨が十分に降って、（ゆるやかな風が吹く野辺の若草も、）民も潤いの恩恵にあずかる。

100 水積自開池<sup>◎</sup> 水積もりて自づ<sup>おの</sup>から池を開く 化

【式目】雑

【押韻】池（和訓押韻） 池<sup>イテ</sup>（漢和三五韻）

【注釈】「水積」は白居易「池上早夏」に「水積春塘晚、陰交夏木繁（水積もりて春塘晚れ、陰交はりて夏木繁し）」の例があり、水かさが増すという意。「開池」は唐の李益「喜入蘭陵望紫閣峯呈宣上人（喜びて蘭陵に入り紫閣峰を望んで宣上人に呈す）」詩に「地寛留種竹、泉淺欲開池（地寛くして種竹を留め、泉淺くして池を開かんと欲す）」の例がある。池を掘って新たに作る意ととれるが、ここでは「自」とあることから前句の雨によって水が溜り、自然と池ができたということになる。

挙句は祝言をもつぱらとするが、当該句のみでは祝言性は認められない。ただし前句との関係においては、「天子の徳（雨）」が自然に池をなすほどに降り注ぐ、と解釈することができ、その意をもって祝言とするのであろう。  
【訳】（雨が降ったことで）水が溜まっていき、自然と池がで

【附記】41～50句を川崎、51～60句を中村、61～74句を大山、75～87句を河村、88～100句を野澤が執筆した。本稿はJSPS科研費17H02309の助成による。

（おおやま かずや・同志社大学文学部助教）  
（かわさき みおん・慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程）  
（かわむら えいこ・本学大学院文学研究科助教）  
（なかもら たけし・神戸学院大学文学部准教授）  
（のざわ まき・ノートルダム清心女子大学文学部講師）